

『ガゼット・ダムステルダム』紙が映し出す  
近世ヨーロッパの音楽文化  
—— 1695年～1720年の音楽関連広告の調査から ——

La culture musicale en Europe sous l'Ancien Régime dépeinte dans la *Gazette d'Amsterdam*:  
recherche sur les annonces de musique publiées de 1695 à 1720

七 條 めぐみ

SHICHIJO Megumi

Dans les Provinces-Unies (territoire correspondant aux actuels Pays-Bas), qui ont joui d'un essor commercial au 17<sup>ème</sup> siècle, plusieurs journaux ont été publiés depuis la première moitié du siècle. Parmi eux, la *Gazette d'Amsterdam* parue à Amsterdam entre 1691 et 1796 est connue comme l'un des rares médias reflétant les conditions sociales à la veille de la Révolution française. En effet, fondée par l'historien Jean-Tronchin Dubreuil, la *Gazette d'Amsterdam* contient non seulement des articles couvrant des sujets politiques et diplomatiques mais également des événements privés appelés « fait-divers ». Grâce aux travaux de Pierre Rézat, qui a recueilli l'ensemble des *Gazettes d'Amsterdam* dispersées en Europe, nous pouvons consulter ce corpus à la Bibliothèque Nationale de France. Cependant, les articles affichés n'ont retenu l'attention des chercheurs que dans deux domaines, l'histoire politique et commerciale et ils font rarement l'objet de recherches du point de vue de l'histoire culturelle.

Le présent article traitera des annonces de musique dépouillées dans la *Gazette d'Amsterdam* de 1695 à 1720, en les analysant sur le plan statistique et philologique. La lecture des annonces, mises en perspective avec le contexte culturel, permettra d'explicitier le processus de diffusion des œuvres musicales dans les Provinces-Unies et en France sous l'Ancien Régime.

## 1. はじめに

17世紀に商業国として台頭した北ネーデルラント（オランダ）では、世紀の前半から新聞の刊行が相次いだ。中でも、スイス生まれの歴史家デュブレユク Jean-Tronchin Dubreuil（1641-1721）を中心に創刊され、1691年から1796年までの間アムステルダムで刊行された『ガゼット・ダムステルダム *Gazette d'Amsterdam*』紙は、フランス語で書かれた国際紙であるだけでなく、政治・外交記事のほかにも私的な出来事をつづった「三面記事 fait-divers」を含むことから、フランス革命前夜のヨーロッパの世相を映し出す数少ない媒体として知られる。近年、ヨーロッパ各地に散在

する『ガゼット・ダムステルダム』が収集され、フランス国立図書館に CD-R の形で所蔵されたことから、紙面を広範囲かつ網羅的に調査することが可能となった。しかし、そこに掲載される記事や広告はもっぱら政治史や商業史の分野で取り上げられ、文化・芸術史研究の対象となることは少ない。筆者はこれまでに、アムステルダムの楽譜出版者ロジェ Estienne Roger (1665/66-1722) のフランス音楽出版に関する研究を行う過程で、『ガゼット・ダムステルダム』紙におけるロジェの出版広告を調査してきた。それに伴い、同紙に見られる音楽関連の広告の網羅的な収集・調査を行い、これまでに 1695 年～1720 年の 26 年間分を完了した。以上のような経緯から、本稿はこの期間に見られる音楽関連広告を当時の文化的コンテクストに置き直す試みである。なお、この調査年間はロジェの活動期間と結びつくもので、必ずしも 17～18 世紀の音楽文化の変化を読み取るのに十分とは言えない。しかしながら、これまで音楽史の分野でまったく調査されてこなかった『ガゼット・ダムステルダム』紙に光を当てることは、近代以前のヨーロッパの音楽文化を捉える手段として、新聞メディアに注目する意義を提示することにつながる。

本稿に関連するこれまでの研究としては、新聞それ自体に関するものと、出版メディアと音楽文化の関係を扱うものが挙げられる。前者については、主に Rétat によって、ヨーロッパに散逸している『ガゼット・ダムステルダム』紙の収集とデータ化が行われた。また、Rétat は同紙を刊行当時、すなわち 17、18 世紀ヨーロッパの政治情勢の中に位置づけるとともに、記事や広告の統計的な分析や、受容状況の調査を行った (Rétat 2001)。これにより、この新聞が当時オランダ国内だけでなくフランスやドイツ語圏でも広く読まれる国際紙であったことが分かっている。

一方で、本稿は近世および初期近代のヨーロッパにおける、メディアと音楽文化の相互作用を扱うものでもある。同様の問題意識に立脚するものとしては、17 世紀フランスの新聞である『メルキュール・ギャラン *Mercurie Galant*』に掲載された音楽関連記事を扱う研究 (Piéjus 2012)、18 世紀オランダの新聞広告からヨハン・クリスチャン・バッハの作品受容を読み解く研究 (Rasch 2000) などが挙げられる。しかし、18 世紀以前のヨーロッパで刊行された新聞を用いながら、貴族や教会関係者にとどまらない、市民層における音楽実践や作品の受容について考察する研究は数少ない。このような問題意識から、本稿では、『ガゼット・ダムステルダム』紙の音楽関連広告を、当時の音楽文化に照らし合わせながら読み解くことで、新聞メディアの登場が購読者たちの音楽生活にどのような影響を及ぼしたのかを考察することを目的とする。

## 2. 『ガゼット・ダムステルダム』紙について

### (1) 新聞の歴史的位置づけ

本節では、『ガゼット・ダムステルダム』紙の新聞メディアとしての特徴を整理する。同紙の発行期間は 1691 年～1796 年の約 100 年間で、これはフランス国外で刊行されたフランス語の新聞としては、1677 年～1798 年にライデンで刊行された『ガゼット・ド・レイド *Gazette de Leyde*』に次いで長い。刊行は週 2 回で、1 つの号は 4 あるいは 8 ページで構成される<sup>1</sup>。このような発行頻度や期間だけでなく、ヨーロッパ各国の宮廷から発せられるあらゆる法令や談話の情報

図1. 1713年11月17日の『ガゼット・ダムステルダム』より1頁、4頁



を、可能な限り中立的な立場から提供していたことから、『ガゼット・ダムステルダム』は当時のヨーロッパ情勢を詳細に伝える「参照記録 journal de référence」と見なされている。そのような性格のために、当時のフランス外務省の大臣や書記官にも参照され、宮廷に収集されていたという (Rétat 2001, 5)。また、18世紀フランスの代表的な新聞である『ガゼット・ド・フランス Gazette de France』の記事が、王権の公式発表とも言える内容だったのに対し、『ガゼット・ダムステルダム』は流言や暴動などの社会的な出来事、あるいは盗難などの私的な事件など、いわゆる「三面記事」を多量に含む当時唯一の新聞でもあった。このような記事の内容から、同紙はフランス革命前夜のヨーロッパの政治状況だけでなく、社会情勢をも映し出す鏡として位置づけられる。

## (2) 創刊の経緯

アムステルダムでは1660年代から80年代にかけて、複数の『ガゼット・ダムステルダム』と称する新聞が存在していた。しかし、1679年に市長よりその看板を掲げることが禁止される<sup>2</sup>。これらを一歩化し、当局の許可を得て刊行を実現させたのが、ジュネーヴに生まれ、フランスで教育を受けたプロテスタント教徒のデュブレユであった。彼はその信仰のためにフランスを逃れ、1682年にアムステルダムに移住すると、教養の深さからただちに新聞の発行を要請された (Rétat 2001, 35-36)。その後、亡命ユグノー (プロテスタント教徒) による手紙を集めた新聞をしばしば刊行したのち、1690年にアムステルダム市長からフランス語新聞を刊行する同意を得ると、同年3月27

<sup>1</sup> 紙面は310mm × 440mmの紙を半分に折って作られていた。一例として1713年11月17日の号より1頁と4頁を抜粋し、図1として掲載した。なお、『ガゼット・ダムステルダム』一部の号はインターネット上で公開されており、本稿のためには18世紀ヨーロッパの新聞をまとめたウェブサイト *Gazettes européennes du 18e siècle* で公開されているものを使用した。

<sup>2</sup> オランダではフランスとの敵対関係を背景に、しばしばフランス語による新聞の刊行が禁止された。

日に『ガゼット・ダムステルダム』の第1号を刊行する。しかし、しばらくしてアムステルダム市長からの発禁処分を受け、一時休刊となったため、本格的な始動は1691年8月27日を待たねばならなかった。再開に当たり、デュブリユはいかなる方法においても高官の中傷を行わない条件で、「オランダ語の新聞を要約し、最も重要な出来事の中からフランス語の新聞を発行する」許可を得た(Rétat 2001, 25-26)。なお、許可は15年間有効で、手続きを踏めば更新することができた。

このような経緯もあってか、デュブリユは『ガゼット・ダムステルダム』をオランダ国内だけでなく国際的に流通する媒体に成長させるため、広範囲な情報収集と流通のネットワークの確保に尽力した。とりわけフランスに人脈をもつ人物が必要となり、デュブリユはフランス出身の書籍商クロード・ジョルダン Claude Jordan に協力を要請する。ジョルダンは『ガゼット・ド・レイド』の主筆を務め、1688年からはアムステルダムでいくつかの政治・社会紙の執筆に携わっていた人物である。彼が『ガゼット・ダムステルダム』の編集と流通にかかわることで、デュブリユはフランスでの販売ルートを獲得し、読者層を拡大することができたと考えられる。ジョルダンは刊行後ほどなくして『ガゼット・ダムステルダム』の監修からは手を引くが、その後、アムステルダムでの同紙の販売や、フランスの書籍商との仲介役を請け負うことで、流通面でデュブリユを支えた。

### (3) 新聞の受容と読者層

『ガゼット・ダムステルダム』は当初より、オランダ国内よりもフランス国内や、その他のフランス語コミュニティでの需要に応えるために発行された。その主な読者層はパリやオランダのエリートたちや、フランスからオランダやスイスへ避難したユグノーたちだった<sup>3</sup>。このようなエリート向けの国際紙を作ろうとするデュブリユの思惑に反し、フランスでは17世紀半ば以降、出版物に対する厳しい検閲が敷かれており、カトリック教会に反する異端書、反国家文書、誹謗文書、風俗紊乱の書はすべて禁止され、外国から流入する書物は特に厳しい基準で審査された(二宮1982, 13)。しかし、ライデンやユトレヒトといった、同じオランダの都市で発行されたフランス語の新聞がたびたび発禁処分を受けていたのに対し、『ガゼット・ダムステルダム』は一度も大規模な処分を受けることがなかった。それは、創設者デュブリユがフランスの高官や各国大使と個人的に親しかったという政治的な理由もあるが、ヨーロッパ各国の情報が比較的自由に報道され、為政者までもがその情報を欲したからである。また、デュブリユ自身も発禁処分を受けないよう、あからさまなフランス王権の批判は控え、微妙なバランスを維持していたという(Rétat 2001, 49)。

このようなデュブリユの采配が功を奏し、『ガゼット・ダムステルダム』はフランス国内で非常に好んで読まれ、戦時下にはその流通部数が減少するものの、フランス国内で手に入る外国の新聞の約8割を占めていた(Rétat 2001, 133)。発行部数の正確な数字は不明だが、1720年代の印刷工の証言によれば、1号あたり1250部を印刷しており、そのうち750部がフランス国内用、500部がオランダやその他ヨーロッパ諸国用だったと見られる(Rétat 2001, 79-80)。すなわち、『ガ

<sup>3</sup> 1686年～90年を対象にした調査では、フランス人の識字率は男性29%、女性14%にとどまり、新聞の購読者層は社会全体で見ればかなりのエリート層だったことが窺える。(Martin 1988/1996, 316)

『ガゼット・ダムステルダム』は同時代のフランス語新聞の中でも例外的に発禁を免れ、亡命ユグノーや知識人層の間で広く読まれていたと言える。したがってそこに見られる広告は、そのような人々に広く情報を届けるための、最先端かつ有効な手段だったと考えられる。

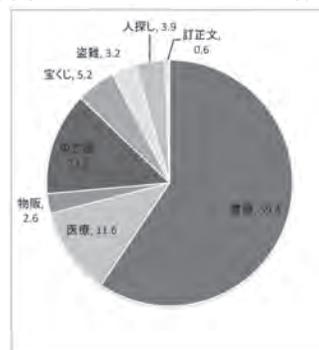
### 3. 『ガゼット・ダムステルダム』紙における音楽関連広告

#### 3. - 1. 広告概観

##### (1) 広告全体の概要

本節では、『ガゼット・ダムステルダム』紙における広告の概要に触れたのち、1695年～1720年に見られる音楽関連広告の具体的な考察を行う。同紙の記事は通常、縦2段組みで書かれているが、広告部分は1段組みとなり、4ページ目あるいは8ページ目の末尾にまとめて掲載される<sup>4</sup>。Rétatの統計によると、年間の広告のべ点数は、1715年の統計で155点、1719年には214点に増加し、最も多い1749年には351点に達する。また、これらの広告を種類別の件数ごとに分類した統計では、

グラフ 1. 1715年の広告の内訳  
(単位は%、Rétat 2001より作成)

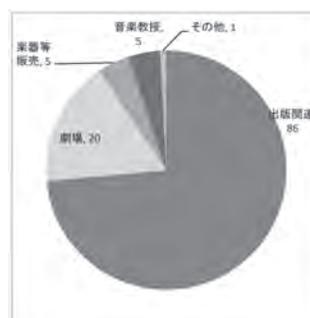


1715年のデータで書籍が59.4%、医者や医薬品の紹介が11.6%、物販が2.6%、中古品の販売が13.5%、宝くじが5.2%、盗難被害が3.2%、人探し3.9%、訂正文が0.6%と、6割近くを書籍が占める結果となっている（グラフ1）。この年代には劇場に関するものが含まれていないが、1760年代以降、広告全体の6%を占めるようになる。さらに、これらの広告の出どころを年代別に比較すると、1715年にはオランダが89.6%、フランスが4.5%だったのに対し、1719年にはそれぞれ59.5%と33.3%に変化している。これには、1701年～14年まで行われていたスペイン継承戦争の影響で、1715年時点でフランスとの通商が滞りがちだったことを反映していると考えられ、広告の出どころは政情により変動するものだと言うことができる。

##### (2) 音楽関連広告

このような中で、筆者が調査した音楽に関する広告は、1695年～1720年までの間にのべ188点、件数では117件確認できた。これらの内訳は、楽譜や台本などの出版に関するものが86件、オペラや演劇などの劇場に関するものが20件、楽器などの販売が5件、音楽教授、いわゆる個人レッスンなどのサービスに関するものが5件、その他が1件という結果になった（グラフ2）。すなわち、出版関連の広告が7割を占めるが、同時に劇場に関する広告が約17%を占め、一定の存在感を示している。

グラフ 2. 音楽関連広告の件数別内訳 (1695年～1720年)



<sup>4</sup> 図1.を参照。1713年11月17日の例では、4ページ目の下部に5点の広告が確認でき、下から2点目が音楽（音楽教授）に関する広告である。

また、個人レッスンにあたる音楽教授や楽器の販売なども含まれ、音楽分野のさまざまな情報を提供する場として広告が機能していたことが分かる。

### 3. - 2. 音楽関連広告解題

#### (1) 劇場に関する広告

本稿ではこれらの音楽関連広告の中から、劇場に関するものと、出版に関するものに焦点を当て、当時の音楽文化の文脈に置き直す。まず、劇場に関する広告は調査期間の中でも、1701年～1706年に集中して確認される(表1)。これらのうち1702年12月8日の《アルミード》再演、1703年1月22日の《イッセ》と4月23日《ベレロフォン》、1706年の《ペルセ》の上演に関しては先行研究での言及が見当たらず、今回の調査により上演の存在を知らせる一つの証拠が見つかったことになる。また、その他の上演が確認される演目に関しても、1710年の《ファエトン》を除いて詳細な上演の日付は分かっておらず、広告によりその推定が可能となったと言える。

表1. 劇場に関する広告一覧(1695年～1720年の『ガセット・ダムステルダム』より抜粋)

年	月/日	号	広告主	内容	典拠(注1)
1701	8/11(木)	64	ARM(注2)	10/1《アルミード》上演予告	Fransen1925, 202-210; Schmidt1987, 200-201; Ahrendt2011, 120, 128.
	11/24(木)	94	ARM	《アルミード》翌週の上演予告	
	11/28(月)	95	ARM	12/1(木)《アルミード》上演の告知、値段と月払いの情報	
	12/1(木)	96			
	12/8(木)	98	ARM	《アルミード》上演日(月、火、金、土)の告知、値段と月払いの情報	
1702	1/26(木)	8	ARM	1/28(土)《アルミード》終演、1/30(月)《アティス》開幕	Fransen1925, 208, 210; Schmidt1987, 200-201; Ahrendt2011, 135.(注3)
	2/2(木)	10	ARM	1/30(月)《アティス》開幕	
	2/16(木)	14	ARM	《アティス》継続上演	
	3/23(木)	24	ARM	《アティス》終演、3/20(月)《イッセ》開幕	
	11/30(木)	96	ARM	11/24(金)《アティス》再開、上演日(月、火、金、土)の告知	
	12/7(木)	98	ARM	12/8(金)《アルミード》再演	
1703	1/18(木)	6	ARM	1/22(月)《テゼ》上演告知、《イッセ》の上演	Schmidt 1987, 200-201.
	3/19(月)	23	ARM	3/16(金)《プロセルピヌ》開幕	Schmidt 1987, 200-201.
	4/26(木)	34	ARM	4/23(月)《ベレロフォン》開幕	
1704	7/1(火)	53	Desechaliers	オペラに基づくコメディの上演予告	Ahrendt2011, 177-178.
	9/5(火)	72	Quesnot de la Chenée	9/6(水)一座の劇場開幕	Ahrendt2011, 177-178.
	10/17(金)	84	Quesnot de la Chenée	さまざまなコメディの上演	
1705	3/31(火)	26	[Quesnot de la Chenée]	コメディ上演の許可取得	Ahrendt2011, 177-178.
1706	1/19(火)	6	Le directeur de l'ARM	《ペルセ》開幕	
	1/22(金)	7			

注1: Ahrendt2011における一部の記述を除いて、上演の日付は明確ではない。

注2: Académie Royale de musique の略。

注3: 《イッセ》に関する記述は見られない。

これらの上演告知のうち、1701年12月に行われた《アルミード》の上演に関する広告が注目になる。この上演のためには、1701年8月11日から1702年1月26日まで6回にわたって告知が行われており、上演に関する広告の中でも作品当たりの数が最多となっている。《アルミード》は作曲家ジャン＝バティスト・リュリ（1632-1687）と台本作家フィリップ・キノー（1635-1688）による最後のトラジェディ・リリックで、パリでは1760年代まで繰り返し再演されたほどの人気作品である。ただし、そのプロローグはあからさまなルイ14世への賛美を含み、物語はキリスト教徒である十字軍の兵士ルノーが異教徒の魔女アルミードを征伐しに行くという、フランス国内におけるプロテスタント弾圧を暗喩するようなものである。このようなことから、フランスと敵対関係にあり、プロテスタント教徒の多いオランダでは、《アルミード》の上演には改革派教会からの強い反発があり、すぐには許可が下りなかった<sup>5</sup>。最終的にはプロローグを書き替え、理性の重視とユグノーの保護を訴える内容に作り変えることで上演許可を得たが、このような経緯のために重ねて告知を行い、集客を図る必要があったと考えられる。

まず、《アルミード》に関する最初の告知である1701年8月11日の広告では、一座の中心人物が明かされるとともに、一座がオランダ総督ウィレム3世の保護下にあることがほのめかされている。

皆様引き続きお知らせします。10月1日にハーグにて、オペラ《アルミード》の上演が始まります。私たちが『ハーグ新報』にて皆様に行った最初の告知に対して、批判がありました。確かに装飾と衣装の一部は、ハンブルク市上院議員のシュット氏のオペラのために使用したのですが、この一座全体はケスノー・ド・ラ・シュネとドゼシャリエの両氏の監督下でのみ展開されます。また、この両人は当一座のことを心から気に掛けるあまり、オペラ、ひいては王の音楽アカデミーをヨーロッパに存在するのと同等に美しく、完璧なものとするために、いかなる出費も労力も惜しみません<sup>6</sup>。

文中で言及されるゲルハルト・シュット Gerhard Schott はハンブルクの上院議員にしてゲンゼマルクト劇場の共同創設者となった人物で、1701年にハーグでのオペラ上演許可を得ている。ハーグには1682年にオペラ一座が滞在し、何らかの上演を行ったことが分かっているが、それ以降、継続した上演は行われていない。すなわち1701年のシュットによる上演は新しいシーズンの幕開けであるとともに、ハーグにおける初のフランス・オペラの上演でもあった。その際、数あるリュリのオペラから《アルミード》が選ばれたのは、シュットが1696年から97年にかけてキールの

<sup>5</sup> 《アルミード》上演の経緯に関しては、Ahrendt 2011を参照。

<sup>6</sup> « On continue d'avertir le public que la premiere Ouverture de l'Opera d'Armide se fera à la Haye le premier d'Octobre. Il y a eu une meprise au premier avis que l'on a donné au Public, dans les Nouvelles de la Haye. Il est vrai que les Décorations & une partie des habits ont servi de Mr. Schott, Senateur de la Ville de Hambours, mais toute cette entreprise ne roule uniquement que sous la direction des Srs. Quesnot de la Chenée & Desechallier ; Et ces deux Mrs. ont si fort pris à cœur cet établissement qu'ils n'épargnent aucune dépence ni aucuns soins, pour rendre l'Opera, ou, pour mieux dire, l'Academie Royale de Musique aussi belle & aussi parfaite qu'il y en ait en Europe. »

劇場で《アルミード》上演した経験があり、衣装や装飾などを新たに用意する必要がなかったからだと言われている。しかし、上述のとおり《アルミード》に関してはハーグ市判事からの許可を得られなかった。そこで、フランス生まれでプロテスタントの台本作家ケスノー・ド・ラ・シュネ Jean Jacques Quesnot de La Chenée、および音楽家ドゼシャリエ Louis Deseschalier と協力し、新たなプロローグの作成に取り掛かったのである<sup>7</sup>。彼らの一座は当初、「ソシエテ・デ・コンセール Société des concerts」という名で活動していたが、1701年の上演告知では「王の音楽アカデミー Académie Royale de Musique」と名乗っている。この名称から、一座が総督ウィレム3世とつながりを持っていたことが推測され、広告には総督からの庇護をほのめかす狙いがあったと考えられる。

また、同年11月28日の広告では、王の保護だけでなく共和国政府からも許可を得た上演であることが明記されるとともに、座席の値段を記し、予約購入が可能であることが書かれている。

ハーグに設立された音楽アカデミーは、オランダと西フリースラントの共和国政府の保護のもと、一日にはオペラ《アルミード》の上演を開始します。興行主は愛好家の皆さんの興味を満足させるために何一つ忘れていないことを保証できるでしょうし、ヨーロッパで最も美しいオペラの一つとなると自負しています。一等の棧敷席はわずか55ソル、二等は44ソルしかいただきません。階段席は44ソル、立見席は22ソルです。二つのバルコニーにまたがる座席には1金ドゥカート支払います。月ごとの予約購入をしたい方は、興行主によって実行され、印刷された規則にしたがって、それを行うことができます<sup>8</sup>。

なお、55ソルは約2.5リーヴル、立見席22ソルは約1リーヴルに換算される。1リーヴルは、当時販売されていた楽譜では合奏曲1ピースや、小規模なエール集と同程度の価格である。また、当時の富裕なオランダ商人は月収が約200リーヴルあったという統計から（杉浦2004:66）、富裕層にとっては、月収の100分の1程度でオペラを棧敷席で観覧することができたことが分かる。

このように、《アルミード》上演時には『ガゼット・ダムステルダム』に複数回広告が掲載され、その内容は一座の主要人物の名前を出し、オランダ総督と共和国政府からの庇護を明記するものだった。一方で、あらすじやプロローグの改変には一切触れられておらず、作品がルイ14世への賛美とプロテスタント教徒の弾圧を示唆する内容だけに、オランダでの上演が受け入れられやす

<sup>7</sup> ケスノー・ド・ラ・シュネは1701～1702年と、1704～1705年にハーグのオペラ上演に携わった。ドゼシャリエはフランス出身の歌手で、1701年にケスノーの一座に加わった。二人は上演許可後に不仲となり、実際の上演の音楽はドゼシャリエではなく、ハーグのフランス教会のオルガニストを務めたと思しきブランケンブルク Quirin van Blankenburg が担当したと推測される（Ahrendt 2011, 140）。

<sup>8</sup> « On avertit le Public, que l'Academie Royale de Musique, établie à la Haye, sous la protection de N. S. les Etats de Hollande & de West-Frise, commencera au premier jour l'ouverture de la Répresentation[sic] l'Opera D'ARMIDE. On peut assurer que les Entrepreneurs n'ont rien oublié pour contenter la curiosité des Amateurs, & on ose se flater que ce sera un des plus beaux Opera de l'Europe. On ne prendra que 55. sols pour chaque Place dans le Loges du premier rang, & 44. sols à celles du second ; 44 sols à Amphitheatre, & 22. sols au Parterre. On peyera un Ducat d'Or pour une place aux deux Balcons. Ceux qui voudront s'abonner par mois pourront le faire, suivant Règlement qui a été fait par les Entrepreneurs, & qui a été imprimé »

くなるような、分かりやすい情報を意図的に取捨選択していったことが窺える。実際、1702年1月26日に終演が告知されるまでの約2か月間、週4回の上演が行われていたようで、《アルミード》に関する一連の広告が功を奏していたと推測される。また、1702年2月2日に出された《アティス》の上演予告において、《アルミード》が好評だったことが書かれ、同年12月7日には再演の予告までもが行われている<sup>9</sup>。このような広告の内容と実際の上演との結び付きから、《アルミード》は当初、上演を危ぶまれたが、広告の後押しによって人気の演目になったと言えるだろう。

## (2) 出版に関する広告

つづいて、出版に関する広告から、劇作品の受容がどのように行われたのかを読み取っていく。今回の調査では、19の出版者による音楽出版に関する広告が83件確認された。もっとも多くの広告を出したのはアムステルダムの出版者ロジェで、協力者ド・ロルムとのものも合わせると24点にのぼる<sup>10</sup>。ロジェに牽引されるようにして、1712年まではアムステルダムの書籍商による音楽関連の出版広告が目立つが、1713年以降、パリとハーグの書籍商たちの名が散見されるようになり、1717年～19年にはパリの書籍商ピエール・リブの広告が16件確認される。

これらの広告の中でも、劇作品の台本およびそれに派生する音楽作品の出版広告に注目する。まず、1695年9月29日の広告では、パリの出版者トマ・ギランによって、フロラン・カルトン・ダンクール Florent Carton Dancourt (1661-1725) の音楽付き劇作品の出版が告知される。出版者ギランは父の代からオランダとの通商を積極的に行っており、トマの代で劇作品の出版に参入し、それをオランダに流通させていたことで知られる。今回の広告はパリの出版者がオランダの消費者に向けて劇作品の出版を告知した例として見るができる一方で、劇作品の音楽のみが独立して出版されることで、作品の受容を促したことを示すものである。

パリ全体が感動をもって観るだろう喜劇《ブゾンの市》は、きわめて楽しい場面を複数付け加え、歌を楽譜で記した状態で、オーギュスタン河川通りの“イマージュ・サン・ルイ”にて、トマ・ギランの所で、ダンクール氏のすべての作品を2巻にまとめて4リーヴルの値段で販売されます<sup>11</sup>。

<sup>9</sup> さらに、アムステルダムでは1689年～1710年頃にかけて《アルミード》に由来する声楽用エール集や器楽用組曲集が出版されている。このような出版の事実も作品の認知度が高かったことを示すものと言える。

<sup>10</sup> ロジェによる音楽関連広告は、イタリア、フランス、オランダ、イギリスの作品を含む多様な出版物を列挙している。とりわけ、出版を開始した1695～96年、パリのバラールから楽譜を受け取った1701年、アムステルダムのモルティエとの競争が激しかった1708～09年に広告点数が多く、新譜を告知したり、ライバル出版者との差をアピールしたりする場として広告を活用していたことが読み取れる。これらの点については、Lesure1969, 七條2017を参照。

<sup>11</sup> « La Comedie de la foire de Beson que tout Paris va voir avec empressement, est augmentée de plusieurs scenes fort plaisantes & le[sic] Chansons notées en Musique tout ensemble se vend 18 solz chez Tomas Guillain sur le Quay des Augustins à l'Image St. Louis, & toutes les Œuvres de M. Dancourt en 2 Tomes pour le prix de 4 livres. » ギランはオランダとの交易を行う書籍商で、オーギュスタン河川通りに住んでいたことから『ガゼット・ダムステルダム』のパリでの販売に関与していたと見られる。

この時販売された《ブゾンの市》は、1695年8月13日にパリのコメディ・フランセーズで上演され、好評を博した喜劇である。ここで書かれている「歌を楽譜で記した状態」の出版物が具体的に何であるか、広告のみでは分からないが、同時期のパリではジャン＝クロード・ジリエ Jean-Claude Gillier (1667-1737) によって作曲された劇中の歌曲がエール集として出版されていた<sup>12</sup>。このことから、《ブゾンの市》に含まれるエールが独立した楽譜として販売されていたことが分かる。また、1701年のロジェの出版カタログでは、《ブゾンの市》をはじめとするダンクールの劇作品は、「フランス語の歌 Chant français」として出版されている。つまり、オランダにおいてもパリと同じように、劇作品の一部が音楽作品として販売されていたのである。

ギランによる広告が1696年に途絶えて以降、『ガゼット・ダムステルダム』ではダンクールの劇作品に関する広告は見られない。しかし、1704年10月17日には、かつて「王の音楽アカデミー」の一員であったケスノーによる広告が確認される。そこでは、「パリと同じ装飾 les mêmes agréments qu'à Paris」による複数のコメディの上演が告知されている<sup>13</sup>。具体的な作品名は言及されていないが、ケスノーの一座が「上演すべき大小100を超える作品 plus de cent Pieces[sic] tant grandes que petites à donner」を有すると書かれ、そこにダンクールの作品が含まれていることも十分に考えられる。すなわち、1695年と1704年の『ガゼット・ダムステルダム』では、劇作品の音楽部分の販売と上演に関する記述がそれぞれ確認され、この両方を享受する文化消費の形が、広告によって促されたと考えられる。

次に、エール集やオペラの台本集をめぐる広告を2点取り上げる。1696年4月5日には、アムステルダムの書籍商ジャン・デュフレーヌによって、エール集の告知が行われる。

アムステルダムの書籍商ジャン・デュフレーヌは、(中略) 優雅なエールとオペラの新しい曲集第10部、第11部を販売します。第12部あるいは第2巻の第6部は、それによって完全な2つの巻となるのですが、まもなく最新の最も美しいエールとともに売り出されるでしょう<sup>14</sup>。

デュフレーヌもやはり、フランス生まれのユグノーの書籍商で、1695年～99年にかけて、このようなエール集の出版を告知した。デュフレーヌの出版物やカタログそのものについては、これまでに所在を確認できていないが、フランスでは1627年～1725年頃まで、バラール社がさまざまな作曲家のエール集を集めた曲集を出版し、人気シリーズとなっていたことが分かっている (Guillo 2010, 82-83)。またアムステルダムにおいても、ロジェが1696年以降、流行の歌をまとめた《恋

<sup>12</sup> *Airs de la comédie de La Foire de Beson, avec l'augmentation*. [1696], s.n. 活版印刷による横長の楽譜で、単旋律または2重唱によるエールが17曲収められている。各曲は16～24小節と短く、通奏低音などの器楽パートは印刷されていない。本稿のためには、フランス国立図書館所蔵の楽譜を参照した。

<sup>13</sup> さらに1717年以降、パリの出版者リブによって再び、ダンクールの劇の台本が宣伝、販売される。

<sup>14</sup> « Jean du Fresne Libraire à Amsterdam [...] Vend la dixième & onzième partie du Nouveau Recueil des Airs galans & de l'Opera. La douzième ou sixième partie du second Tome, qui fera 2 Tom. complets, paroitra dans peu avec les plus beaux airs du tems[sic]... » デュフレーヌは1694年～99年頃まで、フランス語の書物を中心に出版活動を行った。

の歌、酒の歌 *Airs sérieux et à boire*》を継続して出版している。このような事実から、デュプレーヌがこの時期出版したのも流行の歌をまとめたエール集だと推測され、広告の中に「優雅なエールとオペラ」と書かれていることから、劇作品に関連する声楽曲も含まれていたのではないかと推測できる。

また、1712年7月1日には、アムステルダムの書籍商アンリ・シェルトによるオペラの台本集の出版が告知される。

アムステルダムの出版者、アンリ・シェルトが皆さまにお知らせするには、彼は11巻からなるオペラ全集、12折判を、オランダと西フリースラントの許可つきで印刷しました。しかしながら、オペラ《ファエトン》を何者が海賊出版したために、アンリ・シェルトはこのオペラとその他の海賊出版されかねないすべての作品を、それぞれ1ソルで販売します。(中略) それら(楽譜)はユトレヒトの書籍商アブラハム・ヴァン・ティールの所でも手に入れることができます<sup>15</sup>。

シェルトは1693年～1712年までに、リュリのオペラ16作品分の台本を出版したことで知られる。これに先立ち、アムステルダムでは1672年から87年にかけて、アブラハム・ヴォルフガングによるリュリのオペラの台本出版が、パリのバラール版を海賊出版する形で行われた。シェルト版はこれらのヴォルフガング版の再版だが、中には1703年の《テゼ》や《プロセルピーヌ》のように、ハーグにおける作品の上演と同時期に出版されたものもあり、台本の出版がオペラの上演に合わせて行われたことが推察される。この広告で話題となっている《ファエトン》に関しては、劇場側の史料は残されていないが、1710年にハーグで上演されたことを傍証する記録が見ついている<sup>16</sup>。これらの広告と出版の事実を組み合わせると、オランダにおけるフランス・オペラを受容スタイルが浮かび上がってくる。つまり、オペラが上演されると同時に、書籍商たちによって台本やエール集が出版され、それらの広告が購入を促していた。フランス・オペラ受容は、書籍商たちのこのような活動により、上演と出版の両面から行われたことが分かる。

このように、『ガゼット・ダムステルダム』ではパリやアムステルダムの書籍商によって、劇作品の台本やエール曲集の出版が宣伝されることで、オランダにおけるフランスの劇作品の受容を促したことが窺える。この時期、リュリのオペラに派生するエール集や器楽曲を抜粋した「組曲版」は、ロジェやその先駆者世代にとって特に重要な出版レパートリーとなっていた。書籍商たちによる出

<sup>15</sup> « Henri Schelte, Libraire à Amsterdam, fait savoir au Public, qu'il a imprimé un Recueil complet des Opera en onze volumes in 12°., avec Privilege des Etats de Hollande & de West-Frise : Mais parce que quelcun a contrefait l'Opera de Phaëton, Henri Schelte donnera, pour un sol la piece, cet Opera & tous les autres qu'on pourra contrefaire. [...] dont on peut se fournir a Utrecht chez Abraham van Thiel, Marchand Libraire. »

<sup>16</sup> フォン・ウッフェンバッハの旅行記『ニーダーザクセン、オランダ、イングランドをめぐる奇妙な旅 *Merkwürdige Reisen durch Niedersachsen, Holland und Engelland*』(1753/54年、ウルム、マイニンゲン)に「機械仕掛けと舞台転換は許容できるが、その他はきわめてひどい」上演だったと書かれている (Fransen 1925, 227-228)。

版広告は、このような流行とも結びついていると考えられる。劇作品の上演と台本・エール集・組曲版の出版は、それらの広告と一体となって、作品の受容を推し進めたと見ることができる。

#### 4. おわりに

本稿では『ガゼット・ダムステルダム』という、新聞の揺籃期において異例ともいえる国際的な流通を実現させた媒体を対象に、音楽関連広告の分析を行った。それにより、約25年という限られた期間ではあるが、フランス・オペラの上演やそれに基づく出版物が告知され、そのことが劇作品の受容に重要な役割を果たしていた可能性を示すことができた。つまり、広告に書かれた文言から、17世紀末～18世紀初頭のオランダにおいて、オペラや演劇を観に行き、台本やエール集などの出版物を購入し、読み物として楽しんだり演奏したりするという享受のスタイルが形成されていたことが浮かび上がってきた。

また、今回は詳細に取り上げなかったが、これらの広告にはしばしば「愛好家 amateur」という語が使われることから、オペラの興行主や出版者たちが顧客として想定していたのは、職業演奏家ではなく趣味として楽しむ愛好家たちだったということも推測される。このような、貴族や教会関係者だけではなく市民向けの広告が国際的な規模で出されるという現象は、同時期のフランスやイギリスでは見られないものであり、国際的な商業ネットワークと共通語としてのフランス語を武器に台頭した『ガゼット・ダムステルダム』ならではのものだと言えよう。したがって、同紙の広告はオランダだけでなくフランスや周辺国の人々にとっても、情報伝達の場として有効に機能していたと考えられる<sup>17</sup>。今後、より長期間を対象に音楽関連広告の調査・分析を行うことで、オペラ上演や楽譜出版を取り巻く環境の変化が、『ガゼット・ダムステルダム』にどのように反映されているかを明らかにするとともに、近世・初期近代ヨーロッパにおいて音楽作品の国際的な受容を促した新聞メディアの存在に注目する必要があると考える。

---

<sup>17</sup> 実際、1710年代以降、オランダの出版者に混ざってパリの出版者たちの広告が増加することは大変興味深い事実である。

## 主要参考文献一覧

### 【一次史料】

*Gazette d'Amsterdam* (フランス国立図書館所蔵の CD-R を参照。請求記号 MDCR-75, 78)

*Airs de la comédie de La Foire de Beson, avec l'augmentation*. [1696]. (フランス国立図書館所蔵の楽譜を参照。請求記号 Vm7-520)

### 【書籍・論文】

Ahrendt, Rebekah Susannah. 2011. *A Second Refuge: French Opera and the Huguenot Migration, c. 1680-c. 1710*. Doctor Dissertation, University of California, Berkely, Printed by UMI Dissertation Service.

Fransen, Jan. 1925. *Les comédiens français en Hollande au XVIIe et au XVIIIe siècles*. Paris: Librairie Ancienne Honoré Champion.

Guillo, Laurent. 2010. "L'édition musicale française avant et après Lully," *L'invention des genres lyriques et leur redécouverte au XIXe siècle*. Lyon: Symétrie, 79-98.

Lesure, François. 1969. *Bibliographie des éditions musicales publiées par Estienne Roger et Michel-Charles Le Cène (Amsterdam, 1696-1743)*. Paris: Société Française de Musicologie.

Martin, Jean-Henri. 1988/1996. *Histoire et pouvoir de l'écrit*. Avec la collaboration de Bruno Delmas, Paris: Éditions Albin Michel.

Piéjus, Anne. 2012. "Du miroir de la réalité à la construction d'une représentation sociale: L'information musicale dans le *Mercur* Galant," *Noter, annoter, éditer la musique: Mélanges offerts à Catherine Massip*. Genève, Droz, 177-190.

Rasch, Rudolf. 2000. "Johann Christian Bach in Eighteenth-Century Dutch Newspaper Announcements," *Tijdschrift van de Koninklijke Vereniging voor Nederlandse Muziekgeschiedenis*, Deel50, No. 1/2, 5-51.

----- (Ed.) 2005. *Music Publishing in Europe 1600-1900: Concepts and Issues, Bibliography*. Berlin: Berliner Wissenschafts-Verlag.

Rétat, Pierre. 2001. *La Gazette d'Amsterdam: Miroir de l'Europe au XVIIIe siècle*. Oxford: Voltaire Foundation.

Schmidt, Carl B. 1987. "The Geographical Spread of Lully's Operas during the Late Seventeenth and Early Eighteenth Centuries: New Evidence from the Livrets," *Jean-Baptiste Lully and the Music of the French Baroque*. John Haidu Heyer, ed., Cambridge: Cambridge University Press, 183-211.

Sgard, Jean. (Ed.) 1992. "Le jansénisme dans les gazettes de Hollande, 1713-1730," *Les Gazettes européennes de langue française (XVIIe-XVIIIe siècles)*, Saint-Etienne: Publications de l'université de Saint-Étienne

Van Eeghen, I. H. 1960-1978. *De Amsterdamse Boekhandel 1680-1725*. 5 Vols. Amsterdam: Scheltema & Holkema.

七條めぐみ 2017 「アムステルダムにおけるリュリのオペラの組曲版——楽譜出版者エティエンヌ・ロジェ (1665/66-1722) に関する歴史、文献、音楽面からの研究——」愛知県立芸術大学およびパリ＝ソルボンヌ大学のコチュテルによる博士論文。

杉浦末樹 2004 「アムステルダムにおける商品別専門商の成長 1580～1750年——近世オランダの流通構造の一断面——」『社会経済史学』70(1)、49-70頁。

二宮素子 1982 「フランス絶対王政下の書物と検閲」『一橋大学社会科学古典資料センター Study Series』2、1-25頁。

### 【ウェブサイト】

<http://www.gazettes18e.fr/gazette-amsterdam/annee/1713/page/58987> (最終アクセス 2017 年 10 月 18 日)